

戦争について私が思うこと

第二小学校 六年

見 上 沙 希

みなさんは、ロシアとウクライナの戦争は知っていますか？ ロシアがウクライナの土地がほしいがためにウクライナに侵攻したのです。しかし、そのせいでウクライナ民からはたくさんの方が出ています。そこで、戦争について色々考えてみました。

まず、日本の戦争を振り返ります。日本はアメリカと戦争をしていました。そして長引いた末にアメリカが日本に原爆を落としました。死者はなんと二十一万四千人。日本はその日を機に、平和を望むようになりました。

戦争というものは辛いものです。命はもちろん大事だけど、帰る場所、居場所を失うと苦しくなります。もしも当事者で、家族が軍隊で戦って死んだら、それはものすごく悲しいことです。

みんなが幸せに居るためにも、平和を守らなければなりません。そのためには何をしたらいいでしょう。私はいくつか考えて来ました。まずは、みんなが平和を望む。最初からみんなが望むのは難しいので、自分から行動していけば少しは平和になると思います。まずはみんなが平和を望まないと意味がないと思います。そして、世界中に平和のうれしさを訴えかける。日本は原爆を経験しているからこそ訴えら

れることがあると思います。

ここで、もしもの話をしてみましょう。もし日本が攻略されたら。私だったら、日本の住民とみんなの説得します。それでも無理だったら死人があまり出ないように攻撃し、和解を望みます。次に、もし当事者になってしまったら。私だったら、とりあえず身近に居る守れる人を守ります。自分ができることをしたいのです。最後に、もし戦争に巻き込まれたら。戦うか逃げるかの選択だったら。私だったら、戦います。一人でも多くの命を救いたいからです。けど、人が撃てないかもしれないので、もしかしたら逃げるかもしれません。

ロシアとウクライナの戦争の話に戻りますが、この戦争は戦争を企てたプーチン大統領が悪いと私は思います。みんなはロシアが悪いと言いますが、悪いのはプーチン大統領と戦争に賛成する一部の人間だと思います。まず、ロシアの住民は戦争に関与していません。だから私は、ロシアの住民は悪くないと思います。

最後に、どんな世界でも、プーチン大統領の様に、戦争を起こす人は居ると思います。そうなる私達にできることは限られてくるはずです。しかし、私は少しでも戦争を減らしたいです。そのためにできることは、まだわかりません。これからの人生の中で考えていきたいと思っています。

平和を願って

第三小学校 六年

趙

藝

今から、七十八年前の一九四五年八月六日午前八時十五分、広島に原爆が落とされました。その三日後の八月九日午前十一時二分に、長崎に原爆が落とされました。この第二次世界大戦のほかにも、第一次世界大戦、韓国と北朝鮮との戦争、日清戦争、日露戦争、日中戦争、太平洋戦争、そしていま起こっているロシアとウクライナの戦争などの、人の命をうばう、意味のないことがたくさんされてきました。今現在もロシアとウクライナの戦争がおこなわれております。

私は、このような、人の命、生物の命をうばうことをなぜ人類がおこなっているのが分かりません。ミサイルや戦争で家族、恋人、大切な人をうばわれて、悲しくない人なんていません。罪のない人が何万人、何十万人と次々に国の命令で命をうばわれていきます。

このようなことは、決してこれからもおこしてはいけません。戦争をする、というほかに、話し合う、国のトップだけで何回も何十回も会議をするということは、できると思います。

もし、一つの国が勝手に戦争をしているなら、世界のいろんなトップがその国のトップを止めることができます。

このようなことでこれからの世界に戦争というものがなくなり、戦

争で大切な人が亡くなってしまっただとか、家族が亡くなってしまっ
とが、ほぼなくなります。

もちろん戦争のほかに、殺人事件、不注意の事故、自然災害で亡
なってしまう人だってたくさんいます。

これからは戦争というものがなくなり、事件や事故などがへり、み
んなが平等で、みんなが願っている「平和」な世界になれるように、
これからのみんなが幸せだという世界を今生きている人や、これから
生まれる人などに思ってもらえれば、いいと思います。

私は、これからの世界が平和になるよう、願っております。

平和とは

第三小学校 六年

中村

楓

平和とは何だろう

争うから平和じゃない

考える事がうから平和じゃない

にくむから平和じゃない

最初は小さなけんかでも

もっと大きなけんかになる

もっと大きな戦争になる

最後には絶交してしまう

最後に核兵器を使ってしまう

戦争と平和

第三小学校 六年

榊田莉子

たくさんのこうかいがのこる

たくさんのぎせいがでる

おたがいにくみ合い

おたがいにこうかいする

争いはこうかいしか残らない

争いはどうすればおきないのか

争いとは何だろう

話し合いは争いじゃない

相手をきずつけるのが争い

おたがいが悲しむのが争い

話し合いで終わるにはどうするか

小さなけんかで終わるにはどうするか

平和にいるにはどうしたらいいか

私は、戦争がきらいです。その理由は、戦争はけんかだからです。ただの言い合ったりするけんかでは、ありません。戦争は、武器を使って殺し合いをするものなのです。

日本は、昭和二十年八月十五日に終戦し、七十八年を迎えました。

私は、戦争を体験した方の動画を見ました。その方は、

「戦争は、二度とやってはいけない。」

と言っていました。その他にも、

「もう、あの光景はみたくない。」

と言っていました。私は、戦争がどれだけ大変だったかというのがよく分かりました。

ですが、日本はもっと大変な事がありました。それは……。

八月六日、広島に原子爆弾が落ちました。そして、その三日後の八月九日、長崎にも落とされました。アメリカが作った、核兵器が落とされ、広島、長崎では多くの死亡者と負傷者が出ました。そして、その威力にはさすがに、アメリカもまずいと思ったそうです。

そして、その六日後の八月十五日に長かった戦争が終わり、日本はアメリカに負けてしまいました。そして、終わった後広島には、原子

ばくだんが落とされても、産業奨励館のことを原ばくだムとして残されています。そして、その近くに平和記念公園があり、そこには、いれいひもあります。そしてそこには、原子ばくだんで亡くなられた方々へ向けて、文が書かれています。

「安らかに眠って下さい。過ちは繰返しませぬから。」

といれいひに残されています。そして、長崎にも、平和記念公園があり、そこにもいれいひがあります。そのいれいひには、たくさんのお花などがあり、たくさんの方が来てくれることがよく分かります。今ではそこは観光地となり、訪れる海外の方なども多いそうです。

戦争は、二度とやってはいけません。戦争のないことが当たり前と
思っ
てはいけません。もしかしたら、明日戦争が始まる時が来るかも知れません。戦争は、いつ起こるか分からないものです。今の、日本はとても平和です。この平和が当たり前ではありません。私は、この平和がなくならない、戦争がない、世界に変えていきたいです。

広島県・大久野島を旅して

第四小学校 六年

西ケ谷 銀 星

今年の六月、祖父が定年退職をしました。母はその記念に家族旅行を計画していました。ぼくが、

「どこに旅行に行くの？」

と聞くと母はすぐに、

「大久野島という、うさぎがたくさんいる島に行きたいな。うさぎが千羽いるんだって。」

と言いました。最初は何県にあるのかもわからなかったけれど、ぼくはうさぎが好きだし、なるべく早めに夏休みの宿題が終わるように頑張って旅行に行くことにしました。

大久野島へ行くには新幹線で岡山県まで行き、レンタカーに乗って広島市の竹原市のフェリー乗り場まで行って、船で島まで行きました。自然がたくさんある小さな島で、ホテルの周りはハワイのような感じがしました。ホテルに着くまでに、何羽かのうさぎが見えたので、ぼくはわくわくしてきました。

母がホテルに着くと、

「実はこの島は昔、毒ガスを造っていて、毒ガス資料館という所があるから行ってみたい？」

と聞いてきました。ぼくは良くわからなかったけれど、毒ガスと聞き恐ろしくなりました。

毒ガス資料館では、大久野島がどのようにして毒ガスを造っていたのか、防護服や毒ガス製造装置、毒ガスを造っていた人たちが病気になるったり、皮ふがただれてしまったりしている写真がたくさんあって、ショックを受けました。昭和四年から毒ガス工場が大久野島に設置されて、それから十六年間毒ガスを造り続けていたけれど、国民には秘密にされていて『地図から消された島』だったそうです。造られた毒

ガスは戦争で使われていて、たくさんの人たちが亡くなっています。毒ガスを造っていた人たちも、防護服のすき間から入った毒ガスによって目が見えなくなったり、肺炎や気管支炎になったり、皮ふが火傷をしたようになったりして多くの人が亡くなったそうです。大久野島には、そんな人達のためにいれいひが建ててあり、となりには神社やたくさんの千羽づるが飾ってあったので、ぼくたちは手を合わせて「もうこれ以上戦争が起こりませんように」と強く願いました。

旅行から帰ってきて、八月六日に広島県で平和記念式典が行われているのをニュースで見ました。その時、母はただうさぎに会いに行きたかっただけではなく、ぼくたちにも戦争の悲しさや、平和の尊さ、いのちの重さを感じてほしかったんだなと気付きました。ロシアとウクライナの戦争をニュースで見えて悲しい気持ちになっていただけと、遠い国で起きているから日本は大丈夫だと思っていました。日本ではもう絶対に戦争はしてほしくないと思うし、他の国でも戦争でたくさんの人達が亡くなるのはもう終わらせてほしいと思います。この旅行で戦争のことを考えさせてくれた母に感謝したいと思います。

平和はぼくたちが守る

第五小学校 四年

森 太 河

ぼくは、ニュースを見るのがきらいです。毎日、ロシアとウクライナのせん争のニュースを見るからです。大きな建物に、大きなあながあいてこわれたり、もう住めないくらいやけていたり、火がついていたりしています。その近くで子どもが泣いています。

日本は今、とても平和です。ぼくは、学校に行けるし、テレビもゲームも大好きなスイミングスクールにも行けます。家族でごはんもおかしも食べられます。

でも、日本も七十八年前、せん争をしていたそうです。ぼくのまわりでは、ひいおばあちゃんしか、せん争を体けんしている人は生きていません。

ひいおばあちゃんは、そのころ富士市に住んでいました。十三さいの女学校の時、つつに火薬を入れて、ぼくだん作りをして、せん争を助けていたそうです。その時に、マスクもしないで作業をしていたので、火薬のこなが鼻から入り、たおれたこともあったそうです。それが原因で、今も気かんしが弱いと言っています。せん争がはげしくなると、勉強する時間もなくなっていくたそうです。

一九四五年八月に、日本は世界ではじめて原子ばくだんを、広島と

長さに落とされました。何十万人もの人の命が、一しゅんで消えてしまいました。原子ばくだんの落ちた所は三千度になるそうです。

(熱かったらうな。)

(いっばいやりたい事が、あつたらうな。)

と、ぼくは悲しくなりました。

せん争が終わつたあと、住む家が無い人や食料がない人がたくさんいました。ひいおばあちゃんの家は、のう家でした。遠くから、汽車や歩きで、米や野菜を、持って来た物と交かんしてほしいと、頭を下げてたのまれたと言っていました。でも、自分たちの分も必要だから、全部の人には交かんしてあげられなかつたそうです。つらかつたと思えます。

せん争は、ぜつ対にやっつてはいけないことだと思えます。「国のためだ」と、えらい人が言つても、人がきずついたり、死んだりするのは、ただのころし合いと、ぼくは思う。

ぼくは、平和な日本に生まれて、本当に良かつたです。だから、どこかの国で、ぼくくらいの子供たちが、悲しく、つらい思いをしていると思うと、すぐく、くやしいです。

(小学生のぼくに、何かできないかな。)

と考えました。これからぼくは、みんなの命も自分の命も大切にしていこうと思います。それが世界の平和を守ることだと思つたからです。

核と小さな戦争

第五小学校 六年

古屋 帆乃香

今から七十八年前、第二次世界大戦でアメリカの兵が日本に二つの原子爆弾を落とした。被害にあつた広島県、長崎県で、合わせて約二十一万人の人が亡くなつた。

核は怖い。たつた二つ落ちただけで、約七千二百万人いた当時の人々が約七千七十九万人に減つてしまつた。

ここ沼津も空襲によつて焼け野原になつていた。その写真を見て、私はがくぜんとした。今は空は青く、事故もないきれいな平和な町だけど、一度、それとは正反対の状態の沼津になつていたのだ。

核が落とされたのは、この世で日本だけだ。つまり、他の国の人々は核の怖さを知らないということだ。だからこそ、唯一その怖さを知る日本が、どれだけ怖いかわれくらいの人々が亡くなるかを伝えなければならぬ。それが、日本人として生まれて来たことの責務だと、私は思う。それも、未来ある子供たちによつて。

私が考えるのは、全ての戦争はちよつとした小競り合いから始まつて、どんどん発展していつてしまつたということだ。だから、日常生活の中でけんかをしたなら、それはものすごく小さな戦争だということと理解しておきたい。その小さな戦争を話し合ひで解決するか、暴

言という空襲で相手をきずつけるかは自分次第だ。もし、暴言をはいした場合、もっと発展して暴力という核兵器を落としてしまう。それなら当然、話し合いで解決して終わる方が良いだろう。

人間が戦争を起こさないために私が必要だと思うものは、広い器だ。自分のプライドを捨て、相手の考えも取り入れる、「許し合う心」を持つことが大切だと思う。人々は、それができなかったから戦争を起したのだ。

世の中を平和にするなら、まず第一に「自分の心」の平和を保たねばならないと考える。

私は戦争を起こさないために許し合う心を大切にし、自分の心の平和を保つことが平和につながると考える。また、唯一核の怖さを知ることとして、私たちがやるべきことはその怖さを伝え、平和のために核を使わないようにしようという考えを世の中に広めることだと思う。

だれかがこの文を読んで、改めて戦争や核のことについて少しでも考えてみよう、と思ってくれたなら、私は嬉しい。

語りつがれる戦争のこわさ

片浜小学校 五年

松井 旭人

「庄原ばあちゃんは、広島で戦争を体験してるんだよ。」

とお母さんが教えてくれた。庄原ばあちゃんは、ぼくのひいばあちゃんではぼくが赤ちゃんの時になくなっている。だからぼくは庄原ばあちゃんの記憶がない。そこで庄原ばあちゃんの息子のぼくの祖父に話を聞いた。

昭和二十年五月の終わりまで広島市内の病院でかんごしをしていたそう。お父さんに、

「戦争がひどいから庄原に帰ってこい。」

といわれて、庄原に帰ってきた。そこでは、かんごしからはなれて、畑の仕事をしていた。昭和二十年八月六日午前八時十五分ごろ庄原ばあちゃんは畑の仕事をしていたら、せなかの方でピカッと光った。原子爆弾が落とされた。百キロメートル先の庄原でも分かった。それくらい強い力だった。そこで広島市に原爆が落ちた。原爆の放射線を浴びた被爆者達が病院を求めて次々に列車で運ばれた。そして、庄原ばあちゃんがいる庄原市にも、被爆者が来た。それをかんびょうしてた。

ぼくは、庄原ばあちゃんが戦争できずついた人達をかんびょうして

いたと知ってすごいと思った。自分だったら、にげだしていたと思う。また、おばあちゃんが帰ってきてなかったら、広島で原爆のせいで死んでいたかもしれない。生きのびてくれて、本当によかった。

ぼくは、庄原ばあちゃんにもっと話をききたかった。でももういない。戦後七十八年になるそう。戦争をけい験した人達が高れいになり、どんどんへってきている、と祖父から聞いた。ぼくは、今回話を聞いて、戦争のこわさが少し分かった。戦争は、関係ない人がたくさんなくなってしまうからおこしてはいけないし、原爆も使ったらいけないと思った。チャンスがあれば、戦争をけい験した人に聞いて、もっと勉強したい。

平和とは何だろう

大岡小学校 六年

佐藤 幸

みなさんは平和について考えたことはありませんか。私は平和とは戦争がなくみんなが幸せに暮らせることだと思います。そのためにはどのようなことをすればいいのでしょうか。

今から約八十年前、日本はアメリカやイギリスなどと戦争を始めました。中国や東南アジアへ軍隊を進めた日本とこれに反対する、アメリカ、イギリスなどの対立がきっかけです。日本では男の人が次々に

戦場に送り出され、残った女性達も日本を守るためにと訓練しました。武器を作るところで働く子供達、この時代はすべての国民が戦争に協力していったのです。アメリカ軍は日本本土への空襲を開始します。その空襲から子供達を守るために安全な地方へ移動させる、疎開も行われました。

親と遠くはなれ、食事も満足にできない生活はさびしく、辛いことだと思います。

そして、広島や長崎に相次いで原子爆弾が落とされ、一瞬にして何万人もの人々が亡くなりました。太平洋戦争は約四年間戦争を続け多くの人が犠牲になりました。

日本は戦後アメリカを中心とする、連合軍に占領され民主国家として歩み始めます。日本国憲法では国民が主権をもつこと、すべての人がもつ人間としての権利を尊重すること。そして二度と戦争をしないと定められました。七十年前、サンフランシスコ講和会議で日本は四十八ヶ国と平和条約を結びました。

昭和から平成に変わり、日本は先進国の一つとして歩んでいます。民族や宗教のちがいがから生まれる紛争。無差別に人の命をうばうテロ。世界的に進む環境破壊。このような世界の問題に日本はどう向き合っていくのでしょうか。

私は戦争の経験もないし、戦争の本当の怖さだして知らないからすごく共感することはできません。でも戦争の実際の映像や戦後の様子などを見るとその残酷さがとても伝わってきます。たった一つの爆弾によって多くの死傷者が出たなんて私には怖すぎて想像がつかみません。

戦争は人々の平和な毎日を一瞬にして奪ってしまうとても恐ろしいものです。私は改めて命の大切さについて考えました。

今でも世界の戦争や紛争のニュースが次々に流れてきます。そのニュースを見る度に悲しい気持ちと怖い気持ちになります。私はいつでもどこで亡くなるかわからないから、一日一日を大切にし、日頃から家族や友達も大切にしていきたいと思います。

長崎原爆投下から七十八年

愛鷹小学校 五年

梶 栗 颯 葉

八月九日。みなさんはこの日を知っていますか？ 私は最初この日を知りませんでした。ですが、「長崎原爆投下から今日で七十八年目」だということを知りました。

そして、私はある動画を見ました。それは、「ボンボン弾が飛んできて、火の海……」

と、語っていた動画でした。それに対して、
(自分がもしその場にいたら……。)
と考えたら怖くなりました。

また、原爆で亡くなってしまった方は七万三千八百八十四名もいたそうです。さらに、負傷した方は七万四千九百九人も、いたそうです。

そして、三・八万人以上の子供が原爆の犠牲になり、自分が生き残って罪悪感を持つ人がたくさんいたそうです。もし、私も長崎の原爆を実際に見ていたら、罪悪感を持っていたと思います。

そして、私は不意に思いました。原爆は人の笑顔と幸せをうばうということを。ましてや、うばわれたものは、もう一生取り返せない。そんなことを思いました。だから、一日一分、一秒を大切にすごそうという気持ちは今までよく分からなかったけれど、やっと分かった気がします。今こうやって生活していることが幸せだということが一つ学べました。だから、さずかった命は大切にしよう。私はそう思います。

次に、YouTubeで見た、長崎原爆のある、動画がありました。それは、原爆が投下されて長崎県が一瞬にして、見えなくなりました。私にはあまりのおどろきに、声が出ませんでした。

さらに、原爆は広島県にも落とされて、とても辛かったと思います。

だから、一人でも多く戦争や原爆のことを知って、戦争をやめてほしいです。理由は、戦争は、何もうまなしつらい思いをするだけだからです。

そして、家族や友達、自分を大切にしてほしいと思います。

平和な世界を

原小学校 四年

土屋 莉子

沖繩のきれいな海の見わたせる広場にたくさん石ひがずらりと並んでいました。私は、それを見て初めは、とてもきれいだと思いました。でも、よく見てみるとたくさん人の名前がぎざまざっていました。それは、七十八年前の沖繩の戦争でなくなった約二十万人の人達の名前でした。きれいだと思った気持ちは、おどろきと悲しみの気持ちになりました。

私は、昔、日本で戦争があったことは知っているけれど、くわしく話を聞いたりすることは、ありませんでした。たくさんなくなった人の名前を見て、昔、戦争であったことを知りたいと思い、私は平和きねん公園の資料館に入りました。

私が、そこで見たものは、今の日本では想ぞうできないものばかりでした。私より小さな子供が戦争によって、なくなった写真や赤ちゃんが泣いている声をアメリカ兵に気付かれない様に大人が口をふさいでいるすがたもありました。にげている時、のどがかわいてかわいて仕方なくて、どろ水を鼻をつまんで飲んで生きのびた人もいました。どれも見ていて悲しくなりました。その中でも特に心に残ったのは、友達が自分の目の前で戦争のせいで死んでしまった方の話を聞いたこ

とです。今でも、自分だけでも生き残ってしまった方がいいのかと考えてしまうそうです。他にもたくさん人が体験したことを話してくれました。この人達は、戦争の話をすると、つらい思い出を思い出してしまいます。それでも話してくれるのは、もう二度と戦争をしたくないからだと思います。

この沖繩の戦争で約二十万人の人がなくなってしまいました。昔、この日本でこんな戦争があったということを未来でも語り継がれるといいです。私も今回見たことを話していけるといいです。「戦争をおこすのは人間。しかしそれ以上に戦争をゆるさない努力のできるのも人間」という言葉が資料館の最後になりました。私の努力は小さいけれど、もう二度と戦争がおきかない平和な世界になることをねがい続けたいです。

戦争はリセットできない

浮島小学校 四年

落合 樂粹

おぼんになると、いつもおはかに行きます。
おはかのとなりにもう一つおはかがあります。
おじいちゃんが、

「おじいちゃんのお父さんのお兄さんは、せんそうでなくなつたんだ

よ。」

と言っていました。

おはかにかいている文字をよむと陸軍衛生兵長とかいてありました。衛生兵のいみは、人をたすけるためのにんむをする人といういみです。

しらべてみるとせんそうでけがした人を助けるために一番後ろを歩いていたりしていたそうです。

けがをした皆さんの人たちから「衛兵どの」とよばれ、そんなけいされていたそうです。おじいちゃんのお父さんのお兄さんは、そんなけいされていたと思うと、少しじまんしたいような気もちになりました。でも、おじいちゃんのお父さんのお兄さんは、帰ってきませんでした。

せんそうのどこで、どうやってしんでしまったのかわかりません。でも手当てをする人がしんでしまったら、けがした人たちは、とてもこまったのではないかと思いました。けがしてもだいじょうぶと思っただ人も衛生兵がいなくて安心できなくなってしまうと思います。衛生兵はたたかわらない人だったのでぶきをもっています。せんそうは、

せんそうに行く人なのに、ぶきをもっていないとどんなきもちかかんがえるとゲームをするときに、てきのじんちちやくちしてなげまぶぶきをもつかという、自分の命がねらわれてしまうからです。なぜ命がねらわれてしまうかという、それで勝ち負けがきまるからです。

せんそうもたぶん同じで勝ち負けがきまるからです。

せんそうに行ってしまうとみんなぼくのおじいちゃんのお父さんのお兄さんということは知らないと思います。

だれかわからないでケンカをしているようになって、なんでたかっているのかわからなくなるかもしれません。でもゲームみたいにリセツトはできません。

せんそうは、命をうぼうのできらいです。

戦争をなくすために、 今できること

門池小学校 五年

伊藤 栞 理

今年の読書感想文で、『マヤの一生』という本を読んだ。戦争についていろいろ考えた。この本は、家族の一員だった犬のマヤを、戦争で殺さなくてはいけなかった一家の話だ。戦争は、世の中の常識や人の性格を変えてしまう。読みながら涙があふれた。

今年の夏、沼津大空襲について勉強したり、体験した方の話を聞いたりするイベントが明治史料館であった。話をしてくれた岩下佳子さんは、当時六才で、第二小学校に通っていた。空襲で千本浜へ逃げる時、飛行機が次々と焼夷弾を落とすのを見た。周りが火で真っ赤だった。川の方が危険ではないから、皆、川に入ろうとした。その

時、爆弾の破片が片足の小指に刺さった。このけがで、片脚をひざから下で切断することになった。岩下さんは、

「戦争って嫌だね。絶対しちゃいけない。」

と言っていた。七十七年経っても、とても悲しそうだった。

この話を聞いて、めらめらもえる真っ赤な火や、苦しむ人々の姿が思い浮かんだ。聞いていて、怖くて心臓がどきどきした。何で戦争がこの世にあるのだろうと思った。

春休みに広島市の平和記念資料館へ行った。原爆の被害がいろいろ展示されていた。円形の、原爆が落ちる前と落ちる時のイメージがうつし出されるパネルを見て、本当に怖かった。心がふるえた。

戦争は、力で他の国の人達に無理矢理言うことを聞かせることだ。本を読んだり、話を聞いたりして、「戦争は絶対にしてはいけない。」という気持ちが強くなった。人を殺すということは、何よりやってはいけないこと。しかし、戦争は人を殺した分ほめられ、英雄になる。戦っている人の中には、本当は人を殺したくない人もたくさんいたと思う。でも、従わないと、非難されたり、攻撃されたりするから、言えない。戦争は、人から自由も個性も考える力も権利も名前もうばう。

戦争をなくすには、世界中の人が「戦争はしてはいけない。」と思えばよいと思う。そのために、私が今できることは、戦争のことを学ぶこと。調べたり、本を読んだり、史跡をおとすれたりして、これからいろいろな勉強したい。将来は、学んだことを人に伝える活動をした

い。

そして、周りの人達が言っていることをうのみにせず、まずよく考

えたい。もしちがうと思ったら勇気を出して言ってみたい。

『マヤの一生』の、マヤが死んでしまう場面で、マヤの気持ちと家族の気持ちを考えた。そうしたら涙が止まらなくなって、おながが痛くなった。とても苦しかった。実際に体験した人はもつと辛いと思う。今の日本は平和で良かった。でも世界には、ウクライナとロシアのように平和でない所がたくさんある。一日も早く、平和になってほしいと思う。

戦争のつらさ

門池小学校 五年

前田 琴香

私は、テレビを見て原爆を体験した人の話を聞いて悲しくなりました。その人は十五才で原爆を体験しました。その話はとても悲しい話です。

とても暑い日に、小屋の前で休んでいたら原爆が落ち、強い爆風がふき、気を失ってしまいました。そして数分後意識がもどりました。辺りを見たら真っ黒の野原と火の海になっていました。その人は原爆から一・五キロメートルはなれていたので九死に一生を得ました。その人は焼けこげた野原を歩き、学校に向かい、友達を待ちました。そして毎日友達が亡くなり、初めて泣いてしまいました。自分だけ生き残っ

てしまったので、亡くなった友達のプロから冷たい視線を送られて悪い悪感を感じていました。そして原爆しようになっちゃいました。私はその話を聞いた時、

(自分だったらたえられるのかな。なぜ人命をうばうのかな。)

と思いました。そして一番思ったことは、

(なぜ人の幸せをうばうのかな。)

ということですよ。もし私が同じ状態だったらとてもこわいし、悲しいし、苦しいですよ。

私のひいおじいちゃんは兵士で中国に行きました。そして右手の薬指ともをじゅうで打たれ、たまはかん通しました。ひいおじいちゃんは日本の病院に入院しました。入院中に戦争が終わりました。私はその話を聞いた時、

(家族も戦争に行っていたんだな。)

と思いました。もしお父さんが戦争に行ったら生きて帰ってこれないかもしれないので、とても悲しいですよ。

私は戦争とはころし合う事なのでとてもこわい事がよく分かりました。原爆は日本だけしか落とされてないので、もう二度と落ちないよう心から願っています。

戦争は、本当にこわいものなので今後戦争を起こさないために、国と国が仲良くなり、助け合ってほしいですよ。そして人の気持ちを考え、人の幸せを絶対にはわさないようにしようと思えました。

戦争と原爆を世界からなくし、毎日幸せで平和な日々を送っていきたいですよ。

せんそうと平和について

今沢小学校 四年

小風 遥

わたしは、原ばくをたいけんした人から、話を聞きました。原ばくが落とされた日は、昭和二十年八月六日でした。その時、その人は十才で、広島三十キロけんないにある、山口県和木町にいました。その日の八時十五分、朝れいがはじまる時、ピカッと原ばくが光りました。そして、一人でにげているとちゅうで、ばく風にとばされました。それから、まどの外を見たら、きこの雲が見えました。いとこの女学生は、広島でなくなっちゃいました。

原ばくによる死者は、広島で二十数万人はいるとされています。原ばくによる被害は、熱線、ばく風、ほうしゃ線によってもたらされます。熱線の温度は、ばく心地周辺の地表面の温度で、セ氏三千から四千度です。ばく風は、ばく心地から百メートルの地点で、秒速約二百八十メートルと考えられています。ばく心地から約一・二キロ以内で、熱線を直接受けた人は、ひふがやきつくされ、内ぞうまでもしやうがいを受け、ほとんどの人がなくなりました。また、ばく風により、人々はふきとばされて、そく死した人、ふしようした人、建物がこわれて下じきになって、なくなつた人が大ぜいありました。さらに、ほうしゃ線のひがいで病気になるって、なくなつた人もいました。

原ばくが落とされた時、まともな人間はほとんどいませんでした。顔がはれ上がり、くちびるがまっ黒になっていました。もう死ぬと思いい、気が狂ったように日の丸の旗をふりながら、「ぼんざーい。」とさけんでいる者もいました。川の中には、いくつもまっ黒になった死体があり、川べりにもごろごろそこら中に、死体があつたそうです。

わたしは、話を聞いたり、本を読んだりして、原ばくはともおそろしい物だと思いました。今、ウクライナとロシアがせんそうをしています。もし、ロシアが原ばくを落としたら、ウクライナは七十八年前の広島と同じように、ひさんなじょうきょうになつてしまいます。原ばくが落とされたり、せんそうがおこつたら、食べ物も家もなくなつて、死者がたくさんでしてしまうので、原ばくやせんそうはこわいし、いやだと思いました。せんそうや平和とは、どのようなことなのか、テレビを見たり、本やインターネットで調べたり、たいけんをした人に話を聞いたりして、知った上で考えることが大切だと思います。みんなが、せんそうのない世界で、毎日平和にくらせることをねがっています。

受けつがれる命と平和

沢田小学校 六年

栗田晴友

祖父のお墓参りに行った。僕を見守ってください、と手を合わせ、ふと横を見た。以前から気にはなっていたが、初めてまじまじと見た。戦没者の慰霊碑。二人の名前が載っていた。曾祖父のお兄さん二人の名前だ。

陸軍曹長七等功六級。太平洋戦争中、全身魚雷爆創ヲ受ケ戦死。
陸軍軍曹勲七等。太平洋戦争中南方パアニューギニア島飛行場方面ニ放チ戦死。

何とも言えないぞくつとした空気が流れた。母に聞いたことがある。沖縄のひめゆりの塔に行った時、何とも言えない空気に包まれ、気分が悪くなつてしまったと言っていた。国の幸せや家族を思いながらも傷つき散つていった人々の無念の思いが溢あふれているのだろう。

僕は、零戦や特攻隊の話に興味をもっている。映画や本もたくさん見たし、読んだ。

僕のランドセルには、お土産にもらった特攻隊の笛が防犯ブザー代わりについている。でも、この慰霊碑に書いてある内容は作られた話ではなく、この日本で実際にあつたことで、この二人は、僕とつながっている人たちなのだ。人間魚雷。昔は遠隔操作ができないため、兵器

の中に人が入ってそれ自体が爆発する。兵器の中の人は、自分が犠牲になる。攻撃する方も自分が犠牲になる。

もう一人は、「飛行場ニ放ち戦死」と書いてある。特攻隊の飛行機に乗っていて、爆撃をしたことによって亡くなったと思われる。二人とも一瞬にして粉々だ。数えきれない人々が戦争でこのような目にあっただ。

自分のことより国の未来を優先して、国がよくなると信じて戦争に向かう、そんな時代だった。特攻隊の人たちは、自分が絶対死ぬと分かっているのに、戦争に向かわなくてはいけない。僕なら、必ず死ぬのなら絶対に向かいたくないし、恐くてできない。

慰霊碑に向かって、
「恐かった？ 家族に会いたかった？」

と問いかけても返事が返ってくる訳がない。

国のために誇りを持ってこの日本を守ってくれた人たちがいた。

僕は、家族と住み、学校に普通に行き、友達と遊ぶ。そんな平和な国にいる。慰霊碑の前で曾祖伯父に心の中で最敬礼をした。

僕には平和を守る力はまだ無いけれど、平和を祈ることと約八十年前にあった悲劇を忘れないことはできる。

そして僕は、戦争のない平和なこの日本で生きていく。

戦争と原子爆弾

原東小学校 六年

前田 萌 愛

戦争は、人が殺し合い、傷つけ合うことです。自分が死んでしまったり、大切な人を亡くしてしまったりすることもあるおそろしいことだと思います。

八月六日に広島、九日に長崎に原子爆弾が落とされました。原子爆弾によって五十万七千八百八十七人の人が被害にあいました。爆発直後の地上は約三十万度だったそうです。そして、爆発中心部は、約百万度もあったそうです。爆風や、熱線、放射線などが死因になったそうです。運良く生き残っていても、一生傷の残る大きな火傷や、一生物の怪我をしてしまうような強い力をもった爆弾でした。建物は原爆ドームのように焼けこげてしまっていたのでしよう。

私の父は、学生のころ修学旅行で広島平和資料館に行ったそうです。戦争当時の資料やろう人形を見学し、戦争や原子爆弾のおそろしさを再認識したと言います。この話を聞いて私は、

(戦争は、他人事ではないんだな。)
と思いました。

では、このようなことがもう起こらないようにするためにはどうしたらよいでしょう。

私たちが今、出来ることは、この原子爆弾や戦争について、今後語りついで、戦争のおそろしさ、原子爆弾のおそろしい被害などを伝えていくことです。みんなが戦争は、おそろしいもので人が傷つけ合い、殺し合うものだとの再認識し、これからの未来で戦争がなくなる、平和な世界にできることが一番良いことだと思います。

しかし、問題があります。戦争について、原子爆弾について、どんなことがあったのかを語る事が出来る人がどんどん減っています。原子爆弾が日本に落とされたのは約七十八年も前のこととなれば、当時のことを話せる人は、減っていくのも当然でしょう。だからこそ、今当時のことをくわしく話せる人がいる間に、自分から知ろうとする姿勢や、自分が知り、他の人に語りついでいく行動が、大切だと思います。

なぜ戦争が起きる

長井崎小中一貫学校 六年

日吉来晏

今、ウクライナ侵攻が起きており、深刻な問題が発生しているとも言えます。このような戦争は、すぐに解決する必要があり、和解決し合う必要があります。

どうして人間は戦争をするのでしょうか。

それは、口では解決できなくなるほど大きな問題に発展してしまっただからです。

ウクライナは、元々NATOに加盟しようとしたのですが、ロシアがそれに我慢できずゼレンスキー大統領を武力行使して排除しようとしたのが原因です。

世界軍事力ランキング二位のロシアと、十六位のウクライナでは、比べものにならない強さです。それに、ロシアは核保有国ですから、ウクライナより強いです。でもウクライナ側が反撃を強めると報道されています。自分は、反撃するのはあまりよい選択ではないと考えています。

「戦争は根絶できないのか」

という意見が出ると思いますが、人間が怒りという感情を持っている以上は、戦争は根絶することができません。

人は、発明した物を絶対に兵器にします。例えば水素。水素はヘンリー・キャベンディッシュが一七六六年に見つけて、一九六〇年ぐらいにツァーリ・ボンバが作られました。

他にもあります。書ききれないほど。

今、世界の発明家は、兵器に使っている我々を見て、すごく後悔しているでしょう。自分は、もう人類には何も必要ないと思います。

これ以上の物を求めてしまうと、人間は強い兵器を作ってしまうです。

戦争を一時的に止めることはできません。しかし、またどこかで戦争が起きてしまうかもしれません。しかし、もし全ての国、人などが「真

の平和」を手に入れる日が来るのなら、みんなで歌い合える日を、僕は待ち続けています。

つながる命

第一中学校 一年

半藤 穂香

私はよく祖父の家へ行く。一か月に一度は私の家族と祖母と共に昼食を食べる。妹と絵を描くなどして遊ぶこともある。私は仏壇のある部屋で妹と遊んでいた。すると、なぜか壁に掛けてある二枚の写真と目が合った。一枚は女の人、もう一枚は男の人の写真だ。よく見ると、女の人の写真より、男の人の写真の方が若いと思った。なぜなのだろう。祖母に質問し、答えてもらった。

写真の若い男の人は、曾祖父で私の祖父の父だ。曾祖父の仕事は、新聞の従軍記者だった。曾祖母と結婚し、祖父が生まれた。その後、まもなく仕事のため、戦争中のフィリピンのルソン島へ行った。激しい戦いの中で、曾祖父はマラリアという病気で亡くなった。その時、祖父はまだ二歳だった。自分の父親の事をあまり覚えていないと言う。小さな祖父と曾祖母は、闇市で食糧を買い、周囲の人々と親戚の助けを借りながら生活していたという。話を聞いているうちに、昼食の時間が近づいてきた。私は、昼食作りを手伝い、料理をテーブルに置い

た。椅子に祖父母と私の家族が座った。そして、

「いただきます。」

と言うと、祖父が話した。祖父がまだ小さかったころの昔話だ。毎回聞いているが今回は、じっくり聞こうと思った。

「おじいちゃんが小さかった時は、闇市で米や野菜を運んで食べたことがよくあったなあ。小学一年生の頃、給食はずっとパンだった。この頃の食べ物は味がなく、おいしいとは言えなかった。今の子供はおいしい物ばかり食べられて、うらやましいぞ。感謝して食べないとだめだぞ。」

聞いてみると今食べた物が、よりおいしくありがたく感じた。戦争中や戦後は、食べ物が少ない。祖父の父が三十一歳で亡くなってしまったのだから、きつと生きていくのが大変だったはずだ。比べてみると私は、父も母も両方の祖父母もいる。毎日おいしいごはんを給食を食べられる。この幸せな生活ができていると思うと感謝しないだめだ。私は

「ごちそうさま。」

と手を合わせながら心を込めて言った。

戦争が思っていたよりも身近だと感じた私は沼津市の戦争史跡巡りのツアーに参加した事を思い出した。橋には大きな空襲痕があり、あちこちに忠魂碑があった。戦争で使う武器の工場やソナーで相手を見つけるための実験場があった場所など、戦争に関係する所を巡った。なかでも戦争中に疎開した建物を見た時は、とても驚いた。学校みたいな造りになっていて、二人部屋くらいの広さの部屋がいくつかあつ